

絶対的で時間構成する意識の流れとベイズ的把持主義

西村正秀

I 序

時間的経験の本性を巡る近年の哲学的論争では、(1) 映画モデル、(2) 把持モデル (把持主義)、(3) 延長モデル (延長主義) の三つの理論が対立している¹⁾。標準的には、この対立は時間的経験を表象的な心的状態と見なした上で、時間的延長性を表象内容と表象媒体のどれに帰せるのかについての対立であり、(1) は表象内容にも表象媒体にも時間的延長性を認めないモデル、(2) は前者にのみ延長性を認めるモデル、(3) は両者に延長性を認めるモデルである²⁾。エトムント・フッサールの時間意識理論が(2)の代表格とされているのは、「把持主義 (retentionalism)」という名前が把持 (Retention)・原印象 (Urimpression)・予持 (Protention) というフッサールが時間意識に与えた三項構造の一項に由来していることから見て取れる。現在、何人かの哲学者は把持主義をベイズ的知覚理論と組み合わせることによってアップデートしている。この組み合わせを最初に提示したのは、リック・グラッシュである (Grush (2005, 2006, 2007, 2008, 2016))。グラッシュの理論は「軌道見積もりモデル (the trajectory estimation model)」と呼ばれる。グラッシュの目的は、時間的経験に関するフッサールの現象学と知覚の認知科学的説明を結合させることである。彼は一連の著作において、カルマン・フィルタという情報理論的道具立て

を知覚プロセスの説明に適用し、それにフッサールが唱えた時間意識の三項構造を重ね合わせることによって、時間的経験の現象学がベイズ的推論を行う神経システムによって実現されることを提案している。

本稿が問題とするのは、このようなベイズ的把持主義とフッサールの時間意識理論の整合性である。グラッシュは自身の神経科学的アプローチがフッサールの現象学を取り入れたものであることを明言している (Grush (2006))。その際、念頭に置かれているのは、上述の三項構造を基礎とするフッサール理論の把持主義的側面である。しかし、フッサールの理論は把持主義的側面のみを有しているわけではない。フッサールは1909-11年に「絶対的で時間構成する意識の流れ (der absoluten zeitkonstituierenden Bewußtseinsfluß)」という概念を時間意識理論に導入した。この絶対的な意識の流れは表象媒体である時間的経験自体の延長性を含意しており、彼の理論が延長主義的側面も同時に有していることを示している (Hoerl (2013), 西村 (2020))。だが、グラッシュは自己の理論において、絶対的な意識の流れを意図的に無視している。

「第三に、フッサールの分析は把持、予持、原印象以外のものも含んでいる。それは、絶対的で時間構成する流れや、その「二重の志向性」や、把握された今一局面の各々の内容が持つ再帰的構造といったエキゾチックで曖昧な追加要素の

1) この区別は Dainton (2018) による。

2) これは「知覚=表象」とする標準的な前提に基づく説明であり、この前提を是認せずに三つのモデルを素朴実在論的に構成することも可能である。素朴実在論的な延長主義の擁護者には Soteriou (2010) がいる。

ことである。軌道見積もりモデルはこれらの現象には一切言及しない。」(Grush (2006), 448)

グラッシュの理論を引き継ぐ他のベイズ的把持主義者も、絶対的な意識の流れに言及していない(Hohwy et al. (2016), Wiese (2017a))。このことは、時間的経験の説明に関するフッサールのレガシーの中で、使い物になるのは把持主義的側面だけであるような印象を与える。しかし、絶対的な意識の流れは時間的経験における意識の構造を現象学的観点から破綻なく説明するためにフッサールが導入したものであり、言わば、彼の現象学的な時間意識理論の要である。実際、フッサールは自身のキャリアの最後まで、絶対的な意識の流れというアイデアを堅持している。このような重要性を鑑みた場合、フッサール現象学を取り入れたベイズ的把持主義において、絶対的な意識の流れにも何らかのしかるべき場所を与えることはできないのであろうか。

本稿では、この問いに対して肯定的に答えない。具体的には次の二点を示す。第一は、ベイズ的把持主義の動的(dynamic)性格と絶対的な意識の流れの動的性格は重ね合わせることができるという点である。ベイズ的把持主義では外界の変化を反映する(mirroring)内的モデルが措定される³⁾。この内的モデルは動的性格を有しており、それが時間の流れに関する現象的性格を説明する。この特性は、把持的変容や予持充実といった絶対的な意識の流れが持つ動的性格の、神経科学的説明におけるカウンターパートとして理解できる。第二は、ベイズ的把持主義には延長主義的側面を読み込むことができるという点である。グラッシュは近年の論文

で、自身の把持主義が厳密に適用されるのは200ms以内の時間的経験であることを主張している(Grush (2016))⁴⁾⁵⁾。また、同論文では、200ms以内の時間的経験を、「過去・現在・未来」という時間の形而上学におけるA理論的性質ではなく、「より前・同時・より後」といったB理論的性質によって特徴づけることも提案されている⁶⁾。このB理論的性質による特徴づけは、通常的时间的語彙を拒絶する絶対的な意識の流れとの親和性を示唆するのみならず、200ms以内の時間幅における延長主義の可能性も許容するものとして解釈できる。

これら二点を、以下では次の順で論じる。最初に、フッサール理論の把持主義的側面と延長主義的側面を確認する(第II節と第III節)。次に、ベイズ的把持主義をグラッシュの軌道見積もりモデルに焦点を合わせて説明する(第IV節)。続いて、把持主義の厳密な適用を200ms以内のマイクロ・スケールに限定する近年のグラッシュの見解を説明し(第V節)、最後に、フッサール理論の延長主義的側面がベイズ的把持主義に位置付け可能であることを論じる(第VI節)。

II フッサール時間意識理論の把持主義的側面

本節では、フッサールの時間意識理論における把持主義的側面を説明する。フッサールは自身の時間意識理論に何回かの修正を加えている。大別すれば、彼の理論は(1)1904-05年のゲッティンゲン大学における講義、(2)1909-11年に加えられた修正、(3)1917-18年の『ベルナウ草稿』(Husserl (2001))、(4)1930年代の『C草稿』(Husserl (2005))に分けることができる。

3) 「内的モデル(an internal model)」とは、外界(環境)を表象する、主体の身体内に形成されるモデルという意味であり、標準的には脳神経状態によって実装される。

4) 200ms以内の時間幅を持つ経験は「見かけの現在(specious present)」と呼ばれることもある。「見かけの現在」はウィリアム・ジェイムズが哲学界に流布させた語句であるが、哲学者の間で必ずしも一意的な仕方で使用されてこなかった。混乱を避けるため、本稿ではこの語句を使用しない。

5) グラッシュの理論を階層的モデルとして発展させているヴァンヤ・ヴィーゼも、時間的経験の現象学自体は把持主義とも延長主義とも両立可能であることを指摘している(Wiese (2017a), 4)。

6) 時間に関するA理論とB理論はジョン・マクタグートが提案したものである(McTaggart (1908))。

(1)(2)の理論は『内的時間意識の現象学』(Husserl (1966)) (以下『内的時間意識』, 引用の際はPIZと略記)に収められている。フッサールの理論が持つ把持主義的側面を支えるのは「把持・原印象・予持」という時間意識の三項構造であるが、これら三つの要素をどのように評価するのかは理論の修正時期によって変化している。ただし、三項構造が把持主義側面を形成する点については基本的に変化していない。本節では、便宜上(2)の理論に焦点を合わせて説明する。(2)の理論は、「絶対的な意識の流れ」を導入して(1)の理論を修正したものである。現代のバイズ的把持主義者がフッサールに言及する際には、ほとんどの場合この時期の理論が念頭に置かれている⁷⁾。

まずは、「把持・原印象・予持」という時間意識作用の三項構造とは何かを確認しよう。フッサールが時間的に延長した出来事として好んで取り上げるのはメロディである。ド・ミ・ソと三つの音が流れるメロディを考えてみよう。フッサールによれば、各音が鳴る瞬間に主体が知覚するのはその音だけだと考えるのは間違いである(PIZ, 19-23)。ミの音を聴いているときにはドの音は知覚されずに記憶された音が呼び起こされているだけだとすると、そのドの音はミが知覚されている時点で意識されているので、過去と現在の両方の時制を同時に持つことになり矛盾が起こるとフッサールは考えた(ソについても、それを知覚ではなく期待の対象とすると同じ問題が起こる)⁸⁾。それゆえ、ド・ミ・ソはすべて記憶や期待ではなく知覚されていなければならない。この過ぎ去った対象とこれから生じる対象を知覚内容に含めるために瞬間的な意識作用に設けられたのが三項構造である。現在の瞬間に与えられているものに向けられる意識作用の位相は「原印象」と呼ばれる。「把持」は少し前に与えられてまだ意識に残っているも

のに向けられる意識の位相である。把持もある意味で記憶の一種であるが、一旦意識から消えたものを再現前させるという通常の意味での記憶とは区別される(フッサールは前者を「一次記憶」、後者を「二次記憶」と呼んで区別している)。「予持」は次に与えられることが予測されるものに向けられた意識作用の位相である。ド・ミ・ソのメロディでミが鳴った時点の意識作用は、ミに向けられた原印象とドに向けられた把持とソに向けられた予持の三項構造を有しており、そこではド・ミ・ソの各知覚が継起するのではなく、ド・ミ・ソという継起が知覚されるのである。

このように三項構造はある時点(「源泉点」と呼ばれる)における瞬間的な知覚経験が過去と未来に延長した内容を持つことを可能としており、それゆえ把持主義的側面を形成している。ただし、フッサールの把持主義には、グラッシュが自己のモデルから排除した「エキゾチックで曖昧な追加要素」が存在する。このうち二重の志向性と絶対的な意識の流れはフッサール理論の延長主義的側面に関わるので次節に回すとして、本節では「把握された今一局面の各々の内容を持つ再帰的構造」を説明しておく。

この再帰的構造とは、時間意識作用の位相が形成する入れ子状態のことである。今度はド・レ・ミ・ファ・ソの五音からなるメロディを例に取ろう。ファが時点 t_4 で主体に与えられているとしよう。その場合、 t_4 では主体はファの原印象に加えて、 t_1 でのドの把持と t_2 でのレの把持と t_3 でのミの把持、さらに、 t_5 で来るのが予期されるソの予持を有している。しかし、把持されているのは、各時点で原印象として与えられた音だけではない。 t_4 において、 t_3 で起こった事柄として把持されているのは t_3 における時間意識全体であり、その意識も三項構造を有している。それゆえ、 t_3 の時点で原印象であった

7) (2)の理論の把持主義的側面と延長主義的側面ならびに両者の関係については、西村(2020)で詳細な説明を与えている。本節と次節3.1の内容は、西村(2020)での説明を簡略化したものである。

8) フッサールは初期のフランツ・ブレンターノの時間意識理論もこの誤謬を犯していると批判している。

ミだけでなく、 t_3 の時点で把持されていたレとド、 t_3 の時点で予持されていたファとソも t_4 の時点で把持されていることになる。さらに、 t_3 の時点で把持されていた t_2 の時間意識も三項構造を有していたので、 t_4 の時点では、 t_3 の時間意識が把持していた t_2 の時間意識も把持されていることになる。この入れ子状態は把持された内容が過去に沈んで行って消えるまで、何重もの仕方で形成される。この把持の入れ子状態は、「把持の把持」と呼ばれる(PIZ, 81)。同じ入れ子状態が予持についても成立することは言うまでもない。

Ⅲ フッサール時間意識理論の延長主義的側面

次に、フッサールの時間意識理論の延長主義的側面を見てみよう。彼の理論が把持主義的側面だけではなく、延長主義的側面も有していることは、近年何人かの研究者によって指摘されている。フッサールの理論の延長主義的側面は、(2)の時期における「絶対的で時間構成する意識の流れ」の導入から生じた。フッサールがこの概念を導入した理由については色々な解釈が提示されているが、ダン・ザハヴィが指摘するように、時間意識がどのように成立するかという問題を現象学的に考察した場合に生じる無限遡行の問題を回避することが一因であったのは確かであろう(Zahavi (1999))⁹⁾。フッサールによれば、主観的時間は絶対的な意識の流れによって構成されるが、ではその絶対的な意識の流れはどのように意識されるのかについて、新たに高階の意識を措定すると無限遡行が生じてしまう。この無限遡行の回避が、(3)から(4)の時期に至るまで、フッサールが時間意識理論に修正を加え続けた主たる理由であった。絶対的な意識の流れという道具立ても、そのような修正の追加に応じて特徴づけが変化していく。本節では、延長主義的側面を説明することに目

的を絞り、(2)と(3)の時期の理論を取り上げて、絶対的な意識の流れがどのように延長主義的側面を形作るのかを見ていく。

3.1. 1909-11年の理論

1909-11年におけるフッサールの理論が延長主義的側面を持つことを詳しく論じたのは、クリストフ・ホールである(Hoerl (2013))。ホールが目にしたのは次の箇所である。

「時間的对象の知覚自体が時間性を有すること、持続の知覚自体が知覚の持続を前提していること、あらゆる時間形式の知覚自体その還元不可能な本質に属する現象学的時間性を有していること、これらのことは確実に明らかである。」(PIZ, 22)

「時間的对象の知覚はそれ自体が時間的对象であるということは、時間的对象の知覚の本質に属する事柄である。あらゆる状況において、時間的对象の知覚は時間的延長性を有している。」(PIZ, 232)

これらの箇所は、時間的経験における表象媒体自体が延長していることを明確に示している。この時間的経験自体の延長性を裏付けるのが、絶対的な意識の流れである。以下では、最初に絶対的な意識の流れとは何かを説明した後、なぜこの流れが延長主義を生み出すのかを、ホールの解釈を下敷きにしながらかを見ることにする。

まず、絶対的な意識の流れから説明しよう。「絶対的意識」とは、時間意識の別名である(PIZ, 284)。この「絶対的」という表現は、「あらゆる構成に先立って」を意味している(*Ibid.*, 73)。要するに、絶対的意識とは、時間的経験を構成する最も基礎的な作用が伴う意識という意味合いである¹⁰⁾。時間意識の探究において、フッサールは通時的な出来事の知覚だけではなく、その知覚する意識そのものの本性も明らかにし

9) ただし、クリストフ・ホールはこの論点に批判的である(Hoerl (2013), 385-89)。

ようとした。この解明において出てきたのが、通時的出来事を表象する媒体が伴う意識そのものも時間的に流れている、すなわち、時間的に延長しているという観察である。この絶対的意識の流れを構成するのは、絶対的意識を伴う時間意識作用が持つ三項構造の再帰的構造、特に1909-11年の理論では、把持の再帰的構造である。ある主体が時点 t_1 でメロディを聞き始めたとしよう。時間の経過に伴い、 t_1 における原印象は t_2 では把持となり、 t_3 では把持の把持となり、という変容が繰り返されていく。このような把持の変容の連続によって、絶対的意識は「一次元的な疑似時間的秩序として意識の流れの中で自己を構成する」(PIZ, 82)。この「一次的な疑似時間的秩序」が絶対的意識の流れである。

だが、「疑似時間的秩序」とは何を意味しているのだろうか。また、絶対的意識が「自己を構成する」とはどのようにして可能であるのだろうか。まず、絶対的意識の流れが疑似時間的であるというのは、この流れは私たちが意識している主観的時間や物理的世界に流れる客観的時間とは異なるということである。「絶対的」という表現が「あらゆる構成に先立って」を意味していることは上で触れたが、この「あらゆる」には、時間的経験の対象やその対象を知覚する心的作用だけでなく、主観的時間(「内在的時間」(Ibid., 83)とも言われる)も含まれる。つまり、絶対的意識の流れは主観的時間そのものを構成するのである¹¹⁾。この時間構成する流れ自体は時間の中に存在しない。これが、流れが疑似的時間性を持つと言われる所以である。

疑似的時間性という特徴からは、絶対的な意識の流れに対して通常の時間を表す語彙を適用することはできないことが帰結する。フッサールによれば、「時間を構成する現象は…明らかに時間において構成される現象とは根本的に異なる対象性である。それは個別的对象でも個別のプロセスでもない。また、そのような対象やプロセスに使用される述語は、時間を構成する現象には有意味な仕方では適用することができない」(PIZ, 74-75)。絶対的な意識の流れはそれが構成する時間的对象や主観的時間とは別の存在論的身分を有しており、後者の語彙を前者に適用することはカテゴリー・ミスレイクなのである。

次に、絶対的意識の流れが「自己を構成する」ことはいかにして可能にせよ。フッサールによれば、絶対的意識の流れは「二重の志向性」を持つ(PIZ., 379)。この二重の志向性は「横の志向性(Querintentionalität)」と「縦の志向性(Längsintentionalität)」(Ibid., 81-82)とも呼ばれる。前者はそれによって、「内在的時間、すなわち、そこにおいて持続や存続するものの変化が生じる対象的時間、真正な時間が自己を構成する」志向性、すなわち、主観的時間を構成する志向性である(Ibid., 82)⁷⁾。後者はそこにおいて、「流れの諸位相の疑似的時間配列が自己を構成する」志向性である(Ibid.)。時間意識の分析において、フッサールは時間的对象と同時に時間意識そのものも現象することに気がついた。しかし、後者は前者を構成する根源的な道具立てなので、前者と同じカテゴリーには属さない。時間意識(絶対的意識)が把持的変

10) ジョン・B・ブローの指摘によれば、絶対的意識の概念(絶対的意識の流れの概念とは異なる)は1906-07年に導入された。この背景には、(1)の時期まで使用されてきた時間的経験の分析枠組みにフッサールが不満を抱いたという事情がある。この分析枠組みは「統握内容-統握」図式と呼ばれるものであり、そこでは、時間的経験は感覚与件的な内容に統握作用が解釈を与えることによって構成される。この枠組みでは、知覚は現在与えられた内容だけに向けられる作用として狭く理解されていた。だが、フッサールはこの枠組みでは継起を説明できないという考えに至り、この枠組みを捨てた(PIZ, 322)。それと連動して、三項構造の担い手は(狭義の)知覚作用からより基礎的な「絶対的意識」となり、さらに、時間的経験の内容も感覚与件的なものから志向的なものへと変更された(Brough (1991), XLIII-XLVIII, Hoerl (2013), 378-84)。

11) ここから、フッサールは絶対的意識の流れを「絶対的主観性」と呼ぶ(PIZ, 75)。

容によって流れを構成することは既に見たが、それは時間的対象や主観的時間を構成する横の志向性とは異なる縦の志向性が自己に向けられることによってなされるのである。このような形で自己構成する絶対的な意識の流れは、自己現出性という性質を持つ (Ibid., 83)。時間的対象とは異なり、現象の根源である絶対的な意識の流れはその把握に高階の意識を必要としない。それゆえ、絶対的な意識の流れは自己現出という形で現象するのである。

以上が、絶対的な意識の流れの説明である。ホールはこの流れを根拠として、フッサールの時間意識理論には延長主義的側面があることを指摘する。延長主義の特徴は、延長した時間的経験を形而上学的に基礎的な単位と見なす点にある。延長主義では、瞬間的経験は延長した時間的経験の位相としてのみ存在することになる。フッサールが唱える絶対的な意識の流れも、瞬間的位相に対する形而上学的先行性を備えているとホールは主張する (Hoerl (2013), 403-04)。ホールが目指すのは、フッサールによる次の文言である。

「もし何らかのものがある時点で存在するものとして定義されるならば、それはプロセスの位相として、すなわち、ある個体的存在の持続がその時点を含む位相としてのみ想念可能である」(PIZ, 74)。

ホールは、個別的な時間位相の内容が他の時間的諸位相の内容と構成的に依存しているという見解を「外在主義」と呼ぶ (Hoerl (2013), 394)。ホールによれば、絶対的な意識の流れにおいて把持・原印象・予持の三つの時間位相は構成的

に依存し合っている。このことは延長した時間意識が形而上学的に基礎的な単位であることを意味している。各時間位相は、絶対的な意識の流れからの「抽象物」に過ぎないのである (Ibid., 393)。

フッサール理論の延長主義的側面を指摘するホールの議論は説得的である。次節で見るように、絶対的な意識の流れが持つ形而上学的先行性は、『ベルナウ草稿』においてより明確な形で提示されることになる¹²⁾。

3.2. 『ベルナウ草稿』

『ベルナウ草稿』は、『内的時間意識』が編集されていた1917-18年にフッサールが時間意識について再考し、その見解を記したものである。『ベルナウ草稿』におけるフッサールの時間意識理論は錯綜している。『ベルナウ草稿』で中心問題だったのは、前述した無限遡行の問題である。この問題に答えるために、フッサールはいくつかのモデルを検討してそれを否定する作業を繰り返している。このように『ベルナウ草稿』は体系的な著作ではないが、トワヌ・コートゥーンによれば、『ベルナウ草稿』で提示された時間意識のモデルは三つに分類できる (Kortooms (2002), Ch. 4)。さらに、その中にはフッサールが最終的に採用したモデルも存在する。本節では、このようなコートゥーンの整理に従い、彼が指摘する最終モデルに焦点を当てて、それが持つ延長主義的側面を説明する¹³⁾。

『ベルナウ草稿』でフッサールが最終的に採用したモデルは、1909-11年の理論と同様に、絶対的な意識の流れを基盤とした理論である¹⁴⁾。最終モデルが説明されているのは、主として『ベ

12) 延長主義的側面を的確に指摘したにも関わらず、ホール自身は、フッサールの理論は最終的には把持主義として解釈されるべきだと主張する (Hoerl (2013))。このようなホールの主張に対して、フッサールの理論があくまでも延長主義として解釈されることを論じたものとしては西村 (2020) がある。

13) 以下における最終モデルの説明は、Kortooms (2002), 149-74に負う。

14) ただし、用語に関しては違いがある。『ベルナウ草稿』では、原印象は「原現前 (Urpräsentation)」, 絶対的な流れは「原プロセス (Urprozess)」, 「原流 (Urstrom)」と呼ばれる。見通しをよくするために、本稿では『ベルナウ草稿』の理論を説明する際にも『内的時間意識』の用語を使用する。

ルナウ草稿』のテキスト2, 10, 11である。このモデルは、無限遡行を避けるためには絶対的意識は自己構成的でなければならないという観点から提出されている。これは1909-11年の理論で見た絶対的な意識の流れが持つ特徴と同じであり、『ベルナウ草稿』でも1909-11年の理論でも結論としては、絶対的な意識の流れは一階の意識によって自己現出するという主張がなされる。しかし、その結論に至る過程が両者では異なる。『ベルナウ草稿』では、自己構成における予持の役割に焦点が当てられる(Husserl (2001), Text NR. 2, NR. 11)。実は、1909-11年の理論までは、フッサールは予持に詳しい説明を与えていなかった。しかし、『ベルナウ草稿』では、予持と原印象の連動性が絶対的意識の自己構成にとってカギとなるのである。

予持とは、現時点から次に生じうる事柄に向けられた意識作用の位相であった。1909-11年の理論では、予持は絶対的意識が有する、原印象や把持とは区別された意識作用の位相として、抽象的な仕方でも分析されていた。それに対して、『ベルナウ草稿』では、予持は原印象に先立つ意識であり、この予持が充実(Erfüllung)することによって原印象となるというように、予持が動的な仕方でも分析される。充実とは、予持された内容が現実にも生じることを意味している。この予持の充実は、(1)無限遡行に陥らない絶対的意識の自己構成と(2)原印象が持つ身分の新たな特徴づけを説明する。まず、(1)は原印象と把持を含め、すべての時間意識の位相に予持が備わっている点から説明される(Husserl (2001), Text 2; Kortooms (2002), 158-64)。予持は次に生じうる事柄への志向性を持つ。この予持は、当然把持にも備わっている。ある把持 R_1 について、その次に生じる把持 R_2 において把持 R_1 が有していた予持が充実する事態を考えよう。フッサールによれば、このことは、把持 R_2 が把持 R_1 も把持していないと不可能である。元の把持が持つ予持が次の把持において充実することは、充実における意識が、自己が含

む以前の把持に備わっていた予持が志向していた事柄の意識であることを意味している。これは一階の自己意識による説明であり、高階の意識によってメタ的に説明されているわけではない。同様の自己意識構造は、予持においても成立する。このような仕方でも、無限遡行に陥らずに絶対的意識の自己構成が説明できるとフッサールは考えた。

次に、(2)は三項構造の動的な相互連関から示される。時間意識は本質的に予持が充実することによって原印象となるプロセスとして記述される。この場合、原印象はもはや全体から切り離された要素ではなく、連続的な全体の一部として初めて意味を持つ。1909-11年の理論では、原印象が時間意識の出発点であった。絶対的な意識の流れには通常的时间概念が適用できないとフッサールは主張したが、それにも関わらず、原印象には「現時点」「源泉」「今」から生起するもの」という表現を使用している(PIZ, 75)。絶対的な意識の流れは把持の変容による自己構成によって特徴づけられるが、この自己構成はあくまでも今の時点から回顧的な仕方でも把握されるものであり、原印象が時間的延長性の基礎となっていたのである。それに対して、『ベルナウ草稿』では、原印象は充実が増大していく予持と充実が減少していく把持が交差する「限界点(Grenzpunkt)」に過ぎないものとして特徴づけられる(Husserl (2001), 39)。原印象は予持と把持の極限であり、予持や把持から独立にそれ自体で意味を持つことはない。このように、『ベルナウ草稿』では、延長した時間的経験における源泉としての特権的身分が原印象から剥奪されるのである(Kortooms (2002), 188, Bernet (2010), 12)。

多くの論者が指摘しているように、このような予持の働きに注目した三項構造の動的な理解は、フッサールが『ベルナウ草稿』を執筆した時期から、いわゆる発生的現象学へと移行していったことに関係している(e.g., Kortooms (2002), Ch. 5, Bernet (2010), 15-18)。『ベルナ

ウ草稿』以前にフッサールが用いていた方法は静的現象学であった。静的現象学とは、既に意識において構成された対象を取り上げて、その構成を分析する方法であり、その分析は抽象的かつ一般的な性格を帯びる。それに対して、発生的現象学とは、その構成が行われる経緯を探求する方法であり、そこでは、より具体的かつ個別的な事例が取り上げられる。時間的経験について言えば、静的現象学では時間的経験を既に与えられたものと見なして、その意識構造を把持・原印象・予持として抽象化し、それぞれに分析が加えられる。これはまさしく1909-11年の時期までになされていたことである。それに対して、『ベルナウ草稿』以降は、発生的現象学の観点から、原印象が予持からどのように発生し、また、それが把持の発生にどのようにつながるのかという分析がなされる。このような分析においては、原印象はもはや予持と把持から抽象的に分離されたものではなく、これらとの連続性において初めて意味を持つ現象として扱われることになる。

本稿で指摘したいのは、以上の三項構造の動的な理解は、1909-11年に導入されたフッサール理論の延長主義的側面を強化しているという点である。上で述べたように、1909-11年の理論では、原印象に特権の身分が与えられていた。それに対して、『ベルナウ草稿』では、原印象はもはやそれ単独で切り離して考察される意識の位相ではなく、予持と把持が交差する境界、両者の限界点としてのみ特徴づけられていた。このことは、原印象は絶対的な意識の流れという全体の中で初めて、その存在が有意味となることを示している。すなわち、「延長した時間的経験が形而上学的基本単位であり、瞬間的な時間経験は派生的な存在に過ぎない」という延長主義のテーゼが、『ベルナウ草稿』ではより鮮明な形で表明されているのである。

IV グラッシュの軌道見積もりモデル

次に、現代のペイズの把持主義を、グラッシュの軌道見積もりモデルに焦点を合わせて説明しよう。ここでグラッシュのモデルを取り上げるのは、彼のモデルが現代のペイズの把持主義の基礎となっているからである。現在、ペイズの把持主義は予測プロセスモデルと組合せるなど色々な仕方で発展させられている(Hohwy et al. (2016), Wiese (2017a))が、これらの発展形はすべて軌道見積もりモデルを核としているか、それと接続可能な形で展開されているので、フッサールの延長主義との関係を考察するためには、後者を扱うだけで十分である。

軌道見積もりモデルとその射程を理解するためには、(1)「フィルタリング(filtering)・予測(prediction)・平滑化(smoothing)」というペイズの推論枠組みと、(2)時間的知覚のスケール変動性の二点を押さえなければならない。本節では(1)を、次節では(2)を解説する。

軌道見積もりモデルは、把持主義の一種として提案されている。ただし、詳しくは次節で見るが、グラッシュが軌道見積もりモデルを適用するのは、フッサールが論じたメロディの知覚のような長い時間的延長性を持った出来事ではなく、200msという極めて短い時間幅についてである。グラッシュによれば、標準的な把持主義は瞬間的な心的状態が時間的に延長した表象内容を持つという仕方で時間的経験を説明するが、その心的状態は二種類の要素から構成される(Grush (2016), 5)。一つは瞬間的な表象内容を持つ瞬間的な(狭い意味での)知覚状態であり、もう一つは過去の事柄を表象する把持である。この二種類の要素から構成される複合的な心的状態が、ある時点における(広い意味での)知覚状態である¹⁵⁾。それに対して、軌道見

15) グラッシュが理解している標準的な把持主義は、予持的要素を含んでいないという点でフッサールの把持主義とは異なっている。

積もりモデルは、三つの点で標準的な把持主義と異なっている(Ibid, 5-6)。第一に、軌道見積もりモデルはフッサールの予持を含んでいる。第二に、軌道見積もりモデルでは、時間的経験は瞬間的な知覚状態と把持の複合体として理解されるのではなく、単一の(瞬間的な)知覚状態が時間的に延長した表象内容を持つという仕方理解される。第三に、軌道見積もりモデルでは、時間的経験の表象内容は「受動的登録(passive registration)」ではなく「能動的構成(active construction)」によって説明される。フッサールの時間意識理論を含めて、標準的な把持主義では、把持された内容はある時点で知覚された内容がそのままの形で一定の時間維持されるという仕方説明されてきた。これが「受動的登録」で言い表されている事態である。一方、軌道見積もりモデルでは、把持された内容が新しく与えられた情報に応じて常にアップデートされていくという仕方、時間的経験の表象内容が能動的に構成される。このように知覚を推論によって絶えず能動的に構成され続ける産物として理解することはバイズの知覚理論の特徴であり、その能動的構成のメカニズムを説明する道具立てとして使用されるのが「フィルタリング・予測・平滑化」である。

「フィルタリング・予測・平滑化」は、カルマン・フィルタで使用される概念である。カルマン・フィルタとは、信号からノイズを除去する方法の一種であり、通時的に変化する状態を推定する。その推定は、事前知識から得られた見積もりを実際に与えられた情報と照らし合わせてアップデートするというバイズ的方法でなされる。カルマン・フィルタを時間的経験の説明に適応した場合、その表象内容は次の仕方構成される¹⁶⁾。グラッシュによれば、時間的経験は知覚状態(perceptual states)であるが、知覚状態は感覚状態(sensory states)から区別

される(Grush (2007), 10)。感覚状態とは、感官によってピックアップされた、まだ解釈が加えられる以前の情報であり、ノイズや不整合を含んでいる。この感覚状態からノイズを取り去り、主体が事前知識(学習によって獲得された環境についての規則性)に基づいて、自分を取り巻く環境に関する整合的かつ正確な表象として解釈したものが知覚状態である。カルマン・フィルタは、このような知覚状態が形成されるプロセスを説明する。まず、フィルタリングは環境についての正確な表象を形成するために、感覚状態が本来含んでいるノイズを取り除くプロセスである。次に、予測はノイズを取り除いた情報とこれまで形成されてきた環境の表象を基に、新しい未来の環境の表象を予測するプロセスである。最後に、平滑化はその予測をもとに、過去の環境の表象を修正するプロセスである。このようなプロセスを経て形成される知覚状態は、環境がある時点から別の時点の間でどのように変化していくのかという「軌道」をその中間の時点において見積もるものとして理解される。ある時点における知覚状態が通時的軌道を表象内容として持つので、軌道見積もりモデルは把持主義の一種である。「フィルタリング・予測・平滑化」は、フッサールが唱える「原印象・予持・把持」と大まかに対応している。ただし、把持された内容を平滑化によってアップデートするという能動的構成は、フッサールの理論には欠けていた要素である。

グラッシュが平滑化による能動的構成を把持主義に取り入れた理由は、把持された内容が後の時点で変更される可能性があることを主張するためである。時点 t_3 における時点 t_1 ～時点 t_5 の出来事の知覚と、時点 t_4 における時点 t_2 ～時点 t_6 の出来事の知覚を比較してみよう(Grush (2016), 5-6)。両者は t_2 ～ t_5 の時間的延長性を持った出来事の知覚を共有している。

16) グラッシュは、軌道見積もりモデルについて、数式を用いた量的な説明(Grush (2005))と数式を用いない質的な説明(Grush (2007, 2008))の両方を提供している。本稿では後者の説明を取り上げる。

だが、 t_3 における $t_2 \sim t_5$ の知覚内容と、 t_4 における $t_2 \sim t_5$ の知覚内容が同じである保証はない。両者が異なる可能性は、仮現運動などの時間錯覚によって示される。例えば、ポストディクティブ効果（ある知覚刺激が取り下げられた直後に別の知覚刺激が与えられた場合に、後者の刺激が前者の刺激に関する知覚を変化させる現象）は、 t_4 における知覚内容が新たに与えられた情報を反映して t_3 における知覚内容から修正されている事例として解釈できる¹⁷⁾。フッサールの理論では、原印象の内容はそのまま把持に沈んでいくだけであった。このような受動的登録では、ポストディクティブ効果のような事例を上手く説明できない。それに対して、時間的経験が通時的にアップデートされていくことを認める軌道見積もりモデルでは、時間錯覚を無理なく説明することができる。

さらに、グラッシュによれば、軌道見積もりモデルは延長主義に対しても説明力の点で優っている（Grush (2007), 14-15）。延長主義が問題を抱えるのも、時間錯覚の説明についてである。ポストディクティブ効果は、時間的に後に与えられた刺激がそれよりも前に形成された知覚内容を変化させる事例であるが、その刺激が与えられる前の知覚内容と与えられた後の知覚内容が互いに不整合であることを、素朴な延長主義では説明できない。なぜなら、素朴な延長主義ではポストディクティブ効果の始まりの時点から刺激が与えられた後の時点までの時間幅を持った知覚状態が措定され、その時間幅において錯覚されている事柄が知覚内容となるので、刺激が与えられるまでの時間幅における（錯覚がまだ生じる前の）知覚内容が取り込めなくなってしまうからである。また、この難点を回避するために、時間的経験を異なる時間幅を持った複数の知覚状態が連続して生じるという形に延長主義を修正すると、任意の時間幅にお

いて無数の知覚状態が存在することになり、ある時点において無数の知覚状態がオーバーラップしてしまう。したがって、これらの問題が生じない軌道見積もりモデルの方が優れた説明力を有している。

V 時間的経験のスケール変動性

前節で軌道見積もりモデルの概略を示したが、近年グラッシュは、論文「時間的経験の時間的性格、スケール不変動性、ミクロ・スケール構造について」（Grush (2016)）において、このモデルが必ず適用されるべきであるのは200ms以内という極めて短い時間幅であることを主張している。別の言い方をすれば、200msを超えた時間幅に関しては、把持主義ではなく延長主義が成立する余地を認めているわけである（ただし、彼自身は200ms以上の時間幅についても把持主義的説明の方が説得的であろうと推測している）。本節では、Grush (2016)で展開された、そのような時間的経験のスケール変動性について解説する。

グラッシュによれば、時間的経験の本性を巡る議論において、二つの互いに関係する主張が多く論者によって前提されている（Grush (2016), 7）。一つは、時間的経験が持つ時間的性格を、時間の形而上学で言及されるA理論的性質と見なす主張である¹⁸⁾。A理論的性質とは、「過去・現在・未来」という時制的表現によって表される実在的性質である。A理論によれば、時間は未来→現在→過去と向かう実在的な流れとして特徴づけられる。一方、B理論的性質とは、「より前・同時・より後」という非時制的表現によって表される関係的性質である。B理論によれば、時間の流れは実在的なものではなく、出来事間の関係によって規定される。多くの論者が前提している二つ目の主張は、

17) ポストディクティブ効果の代表例はGeldard and Sherrick (1972)が報告した「皮膚ウサギ感覚 (the cutaneous rabbit phenomenon)」であり、グラッシュもこの現象を頻繁に取り上げている。

18) グラッシュはこの例外としてホールを挙げている (Cf. Hoerl (2009))。

時間的性格はスケールによって変動しないというものである。この主張によれば、もし時間的経験がA理論的性質を有しているとするれば、それは例えば数秒から数十秒続くマクロ・スケールの時間的経験についても、200ms以内といったマイクロ・スケールの時間的経験についても、同様に当てはまることになる。

これら二つの前提の両方をグラッシュは否定する。まず、二つ目の前提については、グラッシュは、時間的経験がマクロ・スケールとマイクロ・スケールで異なる時間的性格を持つ可能性を主張する。その上で、一つ目の前提については、時間的経験はマクロ・スケールではA理論的性質を持つが、マイクロ・スケールではB理論的性質を持つことを主張する。すなわち、200ms以内の時間的経験においては、過去と未来にはさまれた「現在」という性質は表象されず、「より前・同時・より後」という出来事間の関係が表象されるというわけである。グラッシュは、このような時間的経験のスケール変動性について、二つの理由を挙げている。第一に挙げるのは、ダニエル・デネットとマルセル・キンズボーンによる「脳の情報処理機構に制約があるため、マイクロ・スケールでは、知覚プロセスは、マクロ・スケールにおいて認識されるような「今」を定義する時点(ここを越えれば時間意識が生じるという正確なフィニッシュ・ライン)を持つことができない」という論点である(Dennett and Kinsbourne (1992))。もしこの論点が正しければ、そもそもマイクロ・スケールにおける時間的経験はA理論的性質を持つことができない。第二の理由は、たとえマイクロ・スケールで時制を特定できなくても、脳は出来事間のB理論的関係を十分に評価できるというものである。例えば、網膜上に二か所の受容野を持つニューロンがあり、それは両受容野に同時に刺激が与えられた場合にのみ発火するとしよう。これは同時性を検知する極めて単純なサーキットである。また、網膜からこのニューロンへの距離が二つの受容野に関して

差があるとした場合、両受容野における刺激からのシグナルの遅延が頻繁に起こるならば、ニューロンの発火は継起を示すものとして脳に理解されるであろう。ここで重要なのは、これらのサーキットは単に「より前・同時・より後」というB理論的性質を検知するだけであり、「現在」や「現在の刺激と過去の刺激」のようなA理論的性質は検知される必要がないという点である。さらに、このようなB理論的性質の表象は、主体の行為にとっても都合が良い。例えば、ボールをバットに当てる行為を考えた場合、ボールの位置やバットの位置を「現在・過去・未来」といったA理論的性質で座標付けようとする余分な時間がかかる。一方、これらを「同時である・より前・より後」といったB理論的性質で表象することは、主体にとってより効率的である。

以上の理由から、グラッシュは200ms以内の時間幅に関しては、時間的経験はB理論的性質を表象すると結論づける。さらに、このスケールにおける時間的経験は、把持主義的に(すなわち、軌道見積もりモデルによって)説明されるべきであることが主張される。というのも、前節で言及した時間錯覚はすべて200ms以内に生じる現象であり、その説明には延長主義よりも軌道見積もりモデルの方が適していると彼は考えるからである。

VI 絶対的な意識の流れと軌道見積もりモデルの両立可能性

それでは、いよいよ「グラッシュの軌道見積もりモデルにフッサールが唱えた絶対的な意識の流れを組み込むことはできるのか」という問いに取り組むとしよう。本節では、この問いに肯定的に答える。

最初に、二点注意をしておきたい。第一に、軌道見積もりモデルはフッサールの時間意識理論を認知科学の道具立てで表現しようとしたものとして解釈できるが、グラッシュ自身はフッサールの現象学的アイデアと知覚の神経科学的

説明を直接的には重ね合わそうとはしていない。むしろ、彼はそのようなプロジェクトに対して批判的な見解を有している(もっとも、グラッシュは神経科学的説明が現象学的説明と完全に無関係であるとは主張していない。彼によれば、両者は間接的な仕方に関係しており、軌道見積もりモデルはまさにフッサールによる時間的経験の表象内容の分析についてのモデルであると断言している(Grush (2006), 447-48))。グラッシュはフッサールの理論を彼とは別の仕方でも組み入れようとするいくつかの理論(Van Gelder (1996), Varela (1999), Lloyd (2002))を取り上げて、絶対的な意識の流れや時間的意識の再帰的構造を神経科学と結び付けようとする彼らの試みは表象媒体と表象内容の混同に基づくものであり失敗していると評価する(Grush (2006))。したがって、軌道見積もりモデルと絶対的な意識の流れの関係を考察する際に、後者を直接的に実装する神経メカニズムを模索することは的外れである。そうではなく、あくまでも現象学的探求の結果得られた絶対的な意識の流れは軌道見積もりモデルの中で一定の役割を果たしうるかという観点から、両者の整合性を検討しなければならない。

第二に、マクロ・スケールの時間的経験に関しては、絶対的な意識の流れを取り込むことについて原理的な困難はないと言える。というのも、グラッシュが明言しているように、このスケールに関しては軌道見積もりモデルと延長主義の両方が可能とされるからである。グラッシュによれば、延長主義にとって問題となるのは時間錯覚の説明であった。前節で見たように、この時間錯覚は200ms以内のマイクロ・スケールで生じる。したがって、マクロ・スケールでは軌道見積もりモデルと延長主義のどちらを採用しようが構わないことになる(もちろん、時間錯覚の説明以外の論点によって延長主義が否定される可能性はあるが)。

では、マイクロ・スケールの時間的経験について、軌道見積もりモデルに絶対的な意識の流れ

を位置づけることはできるのであろうか。第I節で述べたように、本稿で提案したいのは次の二つの主張である。

- (1) 軌道見積もりモデルは、カルマン・フィルタを用いて規定される内的モデルが世界における客観的な時間の流れを反映していることを前提しており、その反映によって時間の流れに関する現象学を説明する。この説明は、動的な内的モデルが時間の流れの現象的性格の基礎となる点で、三項構造の動的プロセスによって時間の流れの現象的性格を説明するフッサールの立場と重なる。
- (2) 絶対的な意識の流れが生み出す延長主義は、グラッシュのモデルに無理なく組み込める。絶対的な意識の流れはB理論的性質によって記述されるので、グラッシュによるマイクロ・スケールにおける時間的経験の特徴づけと矛盾しない。さらに、200ms以内の時間的経験に関しては、グラッシュの主張に反して、延長主義が成立する可能性がある。

以下、これらの主張を擁護する。私の議論が成功していれば、絶対的な意識の流れは軌道見積もりモデルに適切な仕方でも位置づけられるという結論が得られるであろう。

6.1. (1) 内的モデルの動的性格と絶対的な意識の流れ

絶対的な意識の流れを軌道見積もりモデルに組み込む可能性を探る際に最初に見るべきポイントは、意識の流れという現象、すなわち、時間の流れに関する現象的性格が、軌道見積もりモデルでどのように説明されているのかであろう。この問題に関するグラッシュの解答は、「軌道見積もりモデルにおいて指定される時間的経験は構造的表象(structural representation)であり、その表象内容が世界における時間の流れ

を反映していることによる」というものである。

まず、構造的表象とは何かを見ておこう。構造的表象とは、「あるものがある対象を表象するのは、その対象が持つ構造の一部がそのものにも見いだされる場合に限られる、別の言い方をすれば、両者の間に準同型性(homomorphism)がある(表象される対象が表象する対象と準同型である)場合に限られる」という仕方の特徴づけられる概念である(Wiese (2018), 211)。簡単に言えば、構造的表象とは、表象内容と表象媒体の間に構造的な類似性が成立している表象のことである(ヴァンヤ・ヴィーゼはその具体例として地図を挙げている(*Ibid.*))¹⁹⁾。バイズ的知覚理論は、知覚経験を構造的表象として特徴づける傾向にある。バイズ的知覚理論とは、知覚をバイズ的な推論プロセスと見なす理論である。大雑把に言えば、そこでは、学習によって獲得された外界(環境)についての仮説(事前知識)に基づいて、与えられた刺激について、その遠位的原因である環境がどのようなものであるかが推定される。その見積もりが当たる(あるいは外れる)と外界についての仮説の確率が修正されるという形で、知覚プロセスが説明される。脳の神経システムはこのような確率論的推論計算を行うものと見なされ、それゆえ、神経システムによって実装される知覚表象は数学的関数と変数から構成される内的モデルとして理解される。このモデルは、まず数学的对象を表象する。さらに、この数学的内容は、その数学的对象と対応する外界の実在的对象を表象する際の基盤となる(Wiese (2017b, 2018))。この実在的对象によって構成される表象内容が、知覚などにおける認知的内容である²⁰⁾。この数学的内容や認知的内容は、バイズ的な確率計算を行う神経システム(知覚表象)によって決

定されているので、表象媒体と表象内容の間には構造的な類似性が成立している。それゆえ、バイズ的知覚理論では知覚経験は構造的表象として特徴づけられる。

グラッシュ自身は「構造的表象」という語句を使用しないが、ヴィーゼが指摘するように、軌道見積もりモデルで描写される時間的経験は構造的表象である(Wiese (2017b))²¹⁾。グラッシュは心的表象を「エミュレーター(emulator)」として理解している(Grush (1995))。エミュレーターとは、他のシステムの入出力操作を真似る道具立てのことである。グラッシュによれば、知覚などの神経システムはエミュレーターであり、その数学的な計算プロセスを実在的对象のシステムに写像する。それゆえ、心的表象はその内容との構造的類似性を持つ構造的表象である。軌道見積もりモデルで説明される時間的経験も心的表象の一種なので、構造的表象として理解されている。ここで、グラッシュは表象媒体と表象内容の混同を批判していたのにも関わらず、媒体と内容の類似性を唱える構造的表象概念を是認しているが、それは矛盾しているのではないかという反論があるかもしれない。だが、この反論は的外れである。グラッシュが主張するように、内容と媒体が常に相互規定しているという主張は誤りであるが、いかなる場合も両者は無関係だと考えることは過剰反応である(Grush (2006), 441)。

グラッシュの理論において時間の流れに関する現象的性格を説明するのは、以上のような構造的表象として理解される時間的経験の表象内容に付与される動的性格である。時間の流れと内的モデルの関係について、グラッシュは次のように述べている。

19) 構造的表象の擁護者には、他に Bartel (2006), Gładziejewski (2015), Wiese (2017b, 2018) などがいる。

20) ヴィーゼは構造的表象における数学的内容と認知的内容の区別というアイデアを、Egan (2014) から借りている(Wiese (2017b, 2018))。

21) ただし、Bartel (2006)によれば、グラッシュは Grush (1995)で、構造的表象のアイデアは経験科学による支持を欠いていると批判している。

「それが状態のモデルであれ軌道のモデルであれ、内的モデルがその状態をある時点から別の時点へと進展させる (evolve) ときには、この写像に影響を与える関数は、モデルの状態を次のような仕方で進展させるように調整されるべきである。すなわち、そのモデルの状態がその同じ時間幅における現実のプロセスが持つ状態の進展を可能な限り類似して反映させるように、である。このことはつまり、そのモデルの状態の見積りに関する各アップデートが20msかかる場合には、プロセスモデルの状態をアップデートするのに使用される関数は、現実のプロセスがその20msの間に示す変化を反映するような仕方でそのモデルの状態を変化させるべきだということである。」(Grush (2008), 156)

ヤコブ・ホーヴィーたちは、軌道見積もりモデルでは、時間が延長して流れていることは「内的モデルは外界の変化を反映している」という表象内容と媒体の構造的類似性によって説明されているという論点を、この引用箇所から読み取っている (Hohwy et al. (2016))。彼らの指摘は正しい。なぜなら、表象媒体である知覚経験は「フィルタリング・予測・平滑化」というベイズ的推論を行う内的モデルであり、そこでは、その推論が行われるために必要な時間と表象されるプロセスの時間が類似することが要請されているからである。

私はこのホーヴィーたちの指摘に加えて、内的モデルが行う状態の進展はフッサールが唱える絶対的な意識の流れと重なり合うことを提案したい。その根拠は、「フィルタリング・予測・平滑化」というベイズ的推論プロセスが有する動的性格が、絶対的な意識の流れが持つ動的性格と並行していることにある。軌道見積もりモデルにおいて、時間的経験が時間の流れを説明できるのは、単に媒体と表象が構造的に類似しているからではなく、表象媒体である神経システムが次に起こることを予測し、それが実際に与えられる刺激と照らし合わされることによって、通時的出来事の時間的軌道が構成されるか

らである。この論点は次の箇所から確認できる。

「時間を追跡するこの能力は、内的モデルが有する次の二つの異なる動的要素を調整することで得られたものである。(i) 状態見積もりをそれに後続する状態見積もりに写像する(あるいは、連続的な言い方をすれば、モデルの見積もりの進展を支配する)関数であり、それはモデルが環境の動的性格をどのように表象するのかに関する要素である。(ii) 後続する状態見積もりを生むタイミングであり、これはモデル自身の動的性格(あるいは、それを実装する神経機構の動的性格)に関するものである。」(Grush (2008), 157)

時間的軌道を構成するという内的モデルの動的性格と同じ特性は、特に『ベルナウ草稿』における絶対的な意識の流れの特徴づけにも見られる。「フィルタリング・予測・平滑化」はフッサールの時間意識理論における「原印象・予持・把持」に対応している。第Ⅲ節で見たように、『ベルナウ草稿』ではこの三項構造の動的な連関が「予持充実」という形で強調された。その説明によれば、時間的経験では過去の経験をもとに次に起こることが予持され、それが充実することによって、絶対的な意識の流れが構成される。このような絶対的な意識の動的性格は、軌道見積もりモデルにおける時間的経験の動的性格と実質的に同じである。したがって、絶対的な意識の流れを軌道見積もりモデルの中に位置づけることは、内的モデルの動的性格という観点を踏まえれば可能であるということが結論づけられる。

以上の提案に対しては、いくつかの反論が予想できる。最後に、そのような反論を二つ取り上げて退けておこう。第一の反論は、内的モデルの構造的類似性に関するものである。軌道見積もりモデルにおいては、表象媒体である知覚経験は外界でどのような変化が起こるのかを反映しており、この反映が構造的類似性の正体とされていた。しかし、フッサールの時間意識理論においては、絶対的な意識の流れは、客観的

な物理的世界に流れる時間を反映したものではなく、むしろ、主観的時間を構成する根源的な要素であった。このような「時間構成」という性格は、軌道見積もりモデルにおける外的変化の「反映」と齟齬を来すのではないか。

この反論に対しては、次の返答が可能である。軌道見積もりモデルにおける、内的モデルが外界での変化を反映しているという主張は、「神経システムはいかにして外界の出来事を正しく表象するのか」という神経科学的なアプローチからなされている主張である。たしかに、このアプローチでは、外界における変化と内的モデルの両方を俯瞰的に見る視点から時間的経験の説明がなされているため、客観的な物理的世界に流れる時間が前提されている。しかし、バリー・デントンが指摘するように、神経科学的アプローチにおける経験の計算的な記述と現象学的アプローチにおける経験の記述は必ずしも一致する必要はない(Dainton (2017))。絶対的な意識の流れは現象学的アプローチによって得られたものであり、そこでは現象学的還元という意識内在的な方法が採られて、外界に流れる時間は最初から無視されている。このことは、現象学的アプローチ以外のアプローチで時間意識の延長性が検討されている際に外界に流れる時間が考察範囲に入れられていても、原則的には問題がないことを意味している。

第二の反論は、内的モデルが生む時間の流れの主観的性質に関するものである。バイズ的把持主義が措定する内的モデルは動的性格を持つが、この動的性格が説明する時間の流れに関する現象的性格は主観的な時間感覚である。ホーヴィーたちによれば、この「時間の流れに関する主観的感覚」には、(1)自分が時間的に前に進んでいるという感覚と(2)時間が早く、あるいは、遅く経過するという感覚が含まれる(Hohwy et al. (2016))。さらに、(3)時間の流れの感覚には、時間の速さに関する個人差があ

ることも指摘できる(*Ibid.*)。これらの特徴がグラッシュの軌道見積もりモデルで明示的に言及されることはないが、もしバイズ的把持主義で措定される内的モデルがこれらの特徴を持つ主観的な時間感覚を生むものだとすれば、軌道見積もりモデルで説明される時間の流れもこれらの特徴を原理的には所持すると考えられる²²⁾。しかし、これらの特徴は絶対的な時間の流れが持つ特徴としては不適切である。なぜなら、絶対的な意識の流れもたしかに現象であり主観的感覚であるが、第Ⅲ節で見たように、この流れは通常的时间的概念とは異なっており、速さの変化や速さの個人差を含まないからである(PIZ, 74)。

だが、この反論は、内的モデルの動的性格が説明する時間の流れと主観的な時間感覚に関するレベルの混同に基づいている。ホーヴィーたちが指摘するように、たしかにバイズ的把持主義が措定する内的モデルの動的性格は、時間の流れに関する主観的感覚を説明しうる。しかし、この主観的感覚は時間的経験が持つ延長性の現象学とは異なるレベルの特徴として理解できる。後者は時間が流れて延長しているという事柄だけについての意識であり、この意識は内的モデルの構造が生み出す時間の流れによって与えられる。一方、上で述べた(1)(2)(3)は、時間的経験の延長性に関する意識が与えられた後に、それをもとにして得られる感覚である。例えば、時間の流れの速さは、現在自分が意識している時間の流れを過去に経験した時間の流れと比較して感覚されていることだと考えられる。ここでは、時間的経験の延長性に関する意識が先行的に与えられていなければならない。フッサールの言葉を借りれば、(1)(2)(3)の特徴は時間的経験の延長性によって構成された主観的時間の特徴なのであり、両者のレベルの違いを軌道見積もりモデルにおいても設定することに原理的な問題はないと思われる。

22) ホーヴィーたちは、グラッシュはこれらの特徴を上手く説明できていないと批判する(Hohwy et al. (2016))。

6.2. (2) ミクロ・スケールにおける延長主義

前節では、絶対的な意識の流れは軌道見積もりモデルに組み込み可能であることを論じた。ところで、絶対的な意識の流れは延長主義的側面を有していた。そうすると、もし前節の議論が正しければ、軌道見積もりモデルにも延長主義的側面を認める必要が出てくると思われる。本節では、軌道見積もりモデルに延長主義的側面を認めることが可能であることを示す。

軌道見積もりモデルが延長主義的側面を持つことを論じる際にカギとなるのは、グラッシュが200ms以内のミクロ・スケールにおける時間的経験について、このモデルの適用を主張しているという点である。この点は、絶対的な意識の流れが生み出す延長主義が軌道見積もりモデルに認められる理由を二つ用意してくれる。第一の理由は、絶対的な意識の流れが生み出す延長主義もB理論的性質によって説明されうるというものである。残念ながら、『内的時間意識』や『ベルナウ草稿』で時間意識を記述する際に、フッサールは必ずしも用語法を厳密に守っているわけではない。例えば、フッサールが使用する「[原印象の内容が時間の経過に応じて]沈んでいく(sinken)」(PIZ, 29)、「現時点」(Ibid., 75)、「今」(Ibid.)といった語句はA理論的性質を表しているように見える。だが、疑似時間的な絶対的な意識の流れには通常の時間的語彙を適用できないので、厳密に言えば、A理論的性質を表す語句は使用できないはずである。事実、ジョン・B・ブローが指摘するように、フッサールは絶対的な意識の流れを説明する際に、「現在」「過去」「未来」といったA理論的性質

を表す語句を避けて、「現実の時点よりも前(voraktuell)」や「現実の時点より後(nachaktuell)」といったB理論的性質を表す語句を意図的に使用している(PIZ, 83, Brough (2010), 32)。ショーン・ギャラガーとダン・ザハヴィが述べるように、現在・過去・未来という概念は絶対的意識が持つ三項構造の関係に基づいて初めて可能となるのである(Gallagher and Zahavi (2008), 92)。さらに、第Ⅲ節で確認したように、『ベルナウ草稿』では現在(原印象)はそれまで認められてきた源泉としての身分を失い、予持と把持との関係的身分のみを付与されている。これらの事柄は、絶対的な意識の流れとそれが生み出す延長主義的側面が少なくともA理論的性質を表す語彙ではなく、精々のところB理論的性質を表す語句によって記述されることを示している²³⁾。このことは、絶対的な意識の流れが生み出す延長主義をミクロ・スケールに関する軌道見積もりモデルに組み入れる際のハードルを下げる役割を果たす。

第二の理由は、ミクロ・スケールにおいては、軌道見積もりモデルが把持主義であることはむしろ否定される傾向にあるというものである。この否定的傾向は二つの論点によって支持される。第一に、B理論は現在を特権化する理論ではない。B理論では、現在にも過去にも未来にも同じ存在論的身分が付与される。それに対して、瞬間的な知覚経験が時間的に延長した内容を持つことを唱える把持主義においては、知覚経験が生じる時点として、現在に特権的身分が付与される。したがって、ミクロ・スケールにおける軌道見積もりモデルでは、把持主義の要である現在の特権性が捨てられていることになる。

23) このような解釈に対しては、絶対的な意識の流れについては、フッサールはB理論的性質を表す語句すらも使用していないという反論があるかもしれない。たしかに、フッサールは、絶対的な意識の流れは疑似時間的なもので、「時間において継起する」や「互いに同時である」という語句も有意義に使用できないことを主張している(PIZ, 75)。だがその一方で、本文でも記したように、絶対的な意識の流れを構成する把持や予持を描写する際には、少なくとも「より前」や「より後」といったB理論的性質を表す語句を優先的に使用しているのも事実である。

第二に、200ms 以内に関しては、把持主義と延長主義のどちらが正しいかを決定する経験科学的な証拠が存在しない。この論点は、サイモン・プロッサーが展開している(Prosser (2016), 154-58)。第V節で見たように、グラッシュがマイクロ・スケールにおいてB理論的性質による表象内容の説明を主張した理由の一つは、デネットとキンズボーンによる「200ms 以内では、ここを越えれば時間意識が生じるという正確なフィニッシュ・ラインが脳内に存在しない」という論点にあった。プロッサーによれば、このフィニッシュ・ラインの不在は、200ms 以内では把持主義が想定している時間的経験を生むプロセスと延長主義が想定しているプロセスの間に(さらには、映画モデルが想定しているプロセスの間にも)差がなくなることを意味している。200ms まで(プロッサーによると500ms まで)は、どの時点で意識的経験が生じるのかが明確に決まらないとしよう。その場合、出来事Aから出来事Bへの200ms 以内の変化を表す時間的経験が生じるプロセスは、把持主義においても延長主義においても、無意識の状態でもAの情報とBの情報が(200ms 以内に)突き合わされるという同じ仕方でも描写されることになる。したがって、どちらが正しいかを経験的に決定することはできない。

ここで、グラッシュは200ms 以内で生じる時間錯覚については、延長主義の説明は上手くいかないかと反論するかもしれない。第IV節と第V節で見たように、延長主義はポストディクティブ効果を十分な仕方では説明できないとグラッシュは考えていた。彼の診断が正しければ、マイクロ・スケールで延長主義を唱えることはできなくなる。だが、この反論に対しては、マシュー・スチュアート・パイパーが再反論を提出している(Piper (2019), 16-17)。パイパーによれば、時間的経験を生む通時的な知覚プロセスは、過去の記憶を保ちながら振動する神経力学作用に影響を受けることによって、様々な潜伏期間を持つことができる。もしこの仮説が正しければ、

時間的に延長した表象媒体の多様な潜伏期間によって、ポストディクティブ効果に見られる時間的前後関係の倒錯は説明可能となる。グラッシュはこの可能性を見落としているのである。

以上より、マイクロ・スケールにおいては、軌道見積もりモデルは延長主義的側面を持ちうるということが結論づけられる。

Ⅶ 結論

本稿では、フッサールが唱えた絶対的な意識の流れが現代のベイズ的把持主義の中に適切に組み入れられることを、グラッシュの軌道見積もりモデルを取り上げて論じた。絶対的な意識の流れはフッサールの思索時期に応じて異なる仕方でも特徴づけられるが、特に『ベルナウ草稿』における発生現象学的観点からの動的な特徴づけは、ベイズ的推論を行う内的モデルに動的性格を付与する軌道見積もりモデルと原理的には矛盾しないことが示された。また、把持主義の一種として理解されてきた軌道見積もりモデルは、マイクロ・スケールにおいては逆に延長主義的側面を持ちうることも示された。もちろん、時間錯覚において把持が修正される可能性を考慮していなかったことなど、フッサールの時間意識理論にはベイズ的把持主義との相違がある。だが、少なくともこれまで無関係だと考えられてきた絶対的な意識の流れは、実はベイズ的把持主義における居場所を確保されていたのである。

最後に、本稿では扱えなかった問題を述べておく。本稿では、フッサールのキャリアの中で『ベルナウ草稿』における時間意識理論までしか扱えなかったが、フッサールはその後の『C草稿』でも彼の理論を発展させている。この『C草稿』における絶対的な意識の流れが現代のベイズ的把持主義とどのような関係に立つのかについては、今後の検討課題としたい。

【付記】

本稿は、日本現象学会第42回研究大会ワークショップ『フッサール時間論の「現在」』（2020年11月30日オンライン開催）における同題目の口頭発表に基づいている。同発表の概略（実質的には本稿のダイジェストに相当する）は、ワークショップの報告として日本現象学会『現象学年報』37号に掲載されている。

文献

- Bartels, A. (2006). Defending the structural concept of representation. *Theoria* 55: 7-19.
- Bernet, R. (2010) Husserl's new phenomenology of time consciousness in the Bernau manuscripts. In Lohmar, D. and Yamaguchi, I. (eds.) *On Time: New Contributions to the Husserlian Phenomenology of Time* (Dordrecht, Heidelberg, London, New York: Springer Science + Business Media): 1-19.
- Brough, J. B. (1991) Translator Introduction. In Husserl (1991): XI-LVII.
- Brough, J. B. (2010) Notes on the absolute time constituting flow of consciousness. In Lohmar, D. and Yamaguchi, I. (eds.) *On Time: New Contributions to the Husserlian Phenomenology of Time* (Dordrecht, Heidelberg, London, New York: Springer Science + Business Media): 21-49.
- Dainton, B. (2017) Husserl, the brain and cognitive science. In Zalta, E. N. (ed.) *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. URL=https://plato.stanford.edu/entries/consciousness-temporal/husserl-cogsci.html
- Dainton, B. (2018) Temporal consciousness. In Zalta, E. N. (ed.) *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. URL=https://plato.stanford.edu/archives/win2018/entries/consciousness-temporal/
- Dennett, D. and Kinsbourne, M. (1992) Time and the observer: The where and when of consciousness in the brain. *Behavioural and Brain Sciences* 15:183-247.
- Egan, F. (2014) How to think about mental content. *Philosophical Studies* 170: 115-35.
- Gallagher, S. and Zahavi, D. (2008) *The Phenomenological Mind: An Introduction to Philosophy of Mind and Cognitive Science*. London and New York: Routledge. 邦訳：ショーン・ギャラガー、ダン・ザハヴィ (2011) 『現象学的な心：心の哲学と認知科学入門』石原孝二、宮原克典、池田喬、朴嵩哲訳、東京：勁草書房。
- Geldard, F. A. and Sherrick, C. E. (1972) The cutaneous 'rabbit': A perceptual illusion. *Science* 178: 178-79.
- Gładziejewski, P. (2015) Predictive coding and representationalism. *Synthese* 193: 559-82.
- Grush, R. (1995) *Emulation and Cognition*. Ph. D Thesis. University of California, San Diego.
- Grush, R. (2005) Internal models and the construction of time: Generalizing from state estimation to trajectory estimation to address temporal features of perception, including temporal illusions. *Journal of Neural Engineering* 2 (3): 209-18.
- Grush, R. (2006) How to, and how not to, bridge computational cognitive neuroscience and Husserlian phenomenology of time consciousness. *Synthese* 153: 417-50.
- Grush, R. (2007) Time and experience. In Müller, T. (ed.) *Philosophie der Zeit: Neue analytische Ansätze* (Frankfurt: Klostermann): 27-44.
- Grush, R. (2008) Temporal representation and dynamics. *New Ideas in Psychology* 26 (2):146-57.
- Grush, R. (2016). On the temporal character of temporal experience, its scale non-invariance, and its small scale structure. Manuscript. doi:10.21224/P4WC73
- Hoerl, C. (2009) Time and tense in perceptual experience. *Philosophers Imprint* 9 (12).
- Hoerl, C. (2013) Husserl, the absolute flow, and temporal experience. *Philosophy and Phenomenological Research* 86: 376-411.
- Hohwy, J., Paton, B. and Palmer, C. (2016) Distrusting the present. *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 15 (3): 315-35.
- Husserl, E. (1966) *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893-1917)*, Boehm, R. (ed.). *Husserliana X*. Haag: Nijhoff. 英訳：Husserl, E. (1991) *On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time (1893-1917)*, Brough, J. B. (trans.). *Collected Works Vol. IV* (Dordrecht: Springer Science + Business Media). 邦訳：エトムント・フッサール (2016) 『内的時間意識の現象学』谷徹訳、東京：筑摩書房。
- Husserl, E. (2001) *Die "Bernauer Manuskripte" über das Zeitbewusstsein (1917/18)*, Lohmer, D. und Bernet, R. (eds.). *Husserliana XXXIII*. Boston: Kluwer Academic Publishers.
- Husserl, E. (2005) *Späte Texte über Zeitkonstitution (1929-1934): Die C-Manuskripte*, Lohmer, D. (ed.). *Husserliana Materialien Vol. VIII*. Dordrecht: Springer.
- Kortooms, T. (2002) *Phenomenology of Time: Edmund Husserl's Analysis of Time-Consciousness*. Dordrecht: Kluwer.
- Lloyd, D. (2002). Functional MRI and the study of human consciousness. *Journal of Cognitive Neuroscience* 14 (6): 818-31.
- McTaggart, J. M. E. (1908) The Unreality of Time. *Mind* 17: 457-73.
- 西村正秀 (2020) 「フッサールの時間意識理論における延長主義的契機」, 関西哲学会年報『アルケー』28: 112-23.
- Piper, M. S. (2019) Neurodynamics of time

- consciousness: An extensionalist explanation of apparent motion and the specious present via reentrant oscillatory multiplexing. *Consciousness and Cognition* 73.
- Prosser, S. (2016) *Experiencing Time*. Oxford: Oxford U. P.
- Soteriou, M. (2010) Perceiving events. *Philosophical Explorations* 13: 223-241.
- Van Gelder, T. (1996) Wooden iron? Husserlian phenomenology meets cognitive science. *Electronic Journal of Analytic Philosophy* 4.
- Varela, F. (1999). Present-time consciousness. *Journal of Consciousness Studies* 6 (2-3): 111-40.
- Wiese, W. (2017a). Predictive processing and the phenomenology of time consciousness: A hierarchical extension of Rick Grush's trajectory estimation model. In Metzinger, T. and Wiese, W. (eds.) *Philosophy and Predictive Processing* 26. Frankfurt am Main: MIND Group.
- Wiese, W. (2017b). What are the contents of representations in predictive processing? *Phenomenology and the Cognitive sciences* 16: 715-36.
- Wiese, W. (2018) *Experienced Wholeness: Integrating Insights from Gestalt Theory, Cognitive Neuroscience, and Predictive Processing*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Zahavi, D. (1999) *Self-Awareness and Alterity: A Phenomenological Investigation*. Evanston, IL: Northwestern U. P. 邦訳: ダン・ザハヴィ (2017) 『自己意識と他性: 現象学的探究』中村拓也訳, 東京: 法政大学出版局.

The Absolute Time-Constituting Flow of Consciousness and Bayesian Retentionalism

Seishu Nishimura

My aim in this paper is to show that we can coherently locate the absolute time-constituting flow of consciousness, a core idea of Husserlian phenomenology of time-consciousness, into Bayesian retentionalism. Edmund Husserl's theory of time-consciousness has been interpreted as a version of retentionalism, a theory of temporal experience according to which an experience of temporally extended event is a momentary representational state that has temporally extended content. Recently, several scholars pointed out that his theory also has an extensionalist aspect such that both the representational state of temporal experience and its content are temporally extended. What grounds this extensionalist aspect is the absolute time-constituting flow of consciousness Husserl introduced into his theory of time-consciousness during 1909-11. Contemporary Bayesian retentionalists, however, tend to ignore this notion, although they have an intention to connect Husserlian phenomenology with their neurophysiological theory of temporal experience. Against this tendency, I argue that the absolute time-constituting flow of consciousness can be incorporated into Bayesian retentionalism, by focusing on Rick Grush's trajectory estimation model. To be concrete, I establish two things. First, we can identify the dynamic character of Bayesian retentionalism that constitutes temporal flow with that of the absolute time-constituting flow of consciousness. Secondly, Bayesian retentionalism can also have an extensionalist aspect.